

新課程に向けて描く

「学校教育デザイン」

全教師で策定した「育てたい資質」を軸に、 探究学習と進路指導をつなげる

鳥取県・私立青翔開智中学校・高校

アウトライン

建学の精神を具体化し、指導と評価に生かす



自校が目指す「探究」を 教師間で議論して共有

鳥取県・私立青翔開智中学校・高校は、建学の精神「探究・共成・飛躍」の具現化に向けて、2014年度の開校時から、全教科・科目の授業で探究的な活動を、独自科目の「探究基礎」で探究学習を行っている。設置準備段階から学校づくりに携わる織田澤博樹校長は当時、次のような課題を感じていた。「学校全体に建学の精神が十分に浸透しているとは言えず、『探究』について、大学で行うような学術的な研究を『探究』と捉える教師もいれば、調べ学習の内容をレポートにまとめることを『探究』

と捉える教師もいました。指標や指導法を共有する仕組みがなかったため、指導の方向性も統一できていませんでした」

そこで、織田澤博樹校長はまず、建学の精神の中でも柱となる「探究」を明確に定義しようと考えた。自ら「探究基礎」の授業に足を運び、探究学習に取り組む生徒の様子を間近に見る中で定まってきたのは、自校が目指す「探究」は、「生徒が自ら社会問題を発見し、その解決に創造的に取り組んでいく活動」ということだった。織田澤博樹校長は、その考えを週1回の職員会議などで発信し、学校全体で「探究」の定義を共有することを図っていった。

「教師数が二十数人の本校では、日頃から職員室などに話しやすい雰囲気があります。今は、『共成』や『飛躍』の共通理解を図るために、教師間で定義について議論しています」（織田澤博樹校長）

建学の精神を体現する生徒の姿から、「育てたい資質」を考える

次に着手したのは、建学の精神に基づいた「育てたい資質」と、その到達度を測る「評価項目」（図1）の策定だ。当時「探究基礎」を担当していた教師2人が、草案を作成した。担当者の1人、探究部の田村幹樹先生は、「育てたい資質」は具体的な表現から抽象化

SCHOOL PROFILE

設立 2014 (平成 26) 年
形態 全日制/普通科/共学
生徒数 1学年約 45 人
2021年度入試合格実績

(現役のみ、卒業生数 36 人)

国公立大は、東北大、筑波大、東京大、山梨大、島根大、北九州市立大などに9人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、中央大、京都産業大、同志社大、立命館大、鳥取看護大などに延べ57人が合格。海外の大学に、ファウンデーションコースを含め12人が合格。



図1 「育てたい資質」と「評価項目」(抜粋)

階層1	階層2	階層3	タグ
探究	課題設定	疑問・課題を見いだすことができる 課題解決に必要な仮説を立てることができる	1
		課題解決に必要な調査の設計をすることができる	2
	情報 リテラシー	仮説の検証に必要な適切な情報を集めることができる	3
		思考ツールを活用して集めた情報を分析することができる	4
		仮説を検証するために収集した情報を適切に管理することができる	5
共成	セルフ コントロール	公共の精神や社会規範の意識を持っている	18
		状況を判断して取るべき行動を選択しようとする	19
	巻き込み力	チームでの取り組みを主導し、リーダーシップを発揮しようとする	20
		他者に共感し、そのことを表現しようとする	21
		求心力 (図らずとも人がよってくる・信頼されている) がある	22
飛躍	ビジョン	物事の判断や行動に自分がどうありたいかを持っている	33
		学ぶことへの意味・意義を持っている	34
		自身のことを客観的に理解しようとする	35
	アント レプレナー シップ	失敗を恐れずに何事もチャレンジしようとする	36
		どんな環境や状況においても心の余裕を持ち、楽しさを見いだそうとする	37

「探究」は7の資質・能力と17の評価項目、「共成」は4の資質・能力と10の評価項目、「飛躍」は3の資質・能力と10の評価項目を設定した。

* 学校資料を基に編集部で作成。上図の全体像は、同校のウェブサイトからダウンロードいただけます。「HOME」>教育計画>探究スキルラーニング授業紹介」をご覧ください。https://seishokaichi.jp/wp-content/uploads/2021/05/57547fe568cf9f7bf28696fe2918eff1.pdf

を図ったと説明する。「建学の精神を体現している生徒を思い浮かべ、彼らの姿勢や行動を付箋紙に書き出しました。それらを内容が近いものでまとめた上で、各まとまりが示す資質・能力(図1・階層2)を考えて、『育てたい資質』としました。そして、

それぞれが『探究・共成・飛躍』のどれと関連するかを考え、振り分けていきました(図1・階層1)」。草案は、全教師や外部の協力者と議論。その過程で、評価項目には、「〇〇ができる」とスキルの形で表す方が適する項目と、「〇〇しようとする」といった行動特性で

表す方が適する項目があることが分かった。そうした点も踏まえて議論した結果、「探究」に関する評価項目(図1・階層3)はスキルの形で、「共成」「飛躍」に関する評価項目は行動特性の形で表すことにした。さらに、教師・生徒間で共有したり、データ処理をしたりしやすいようタグ(*1)をつけた。

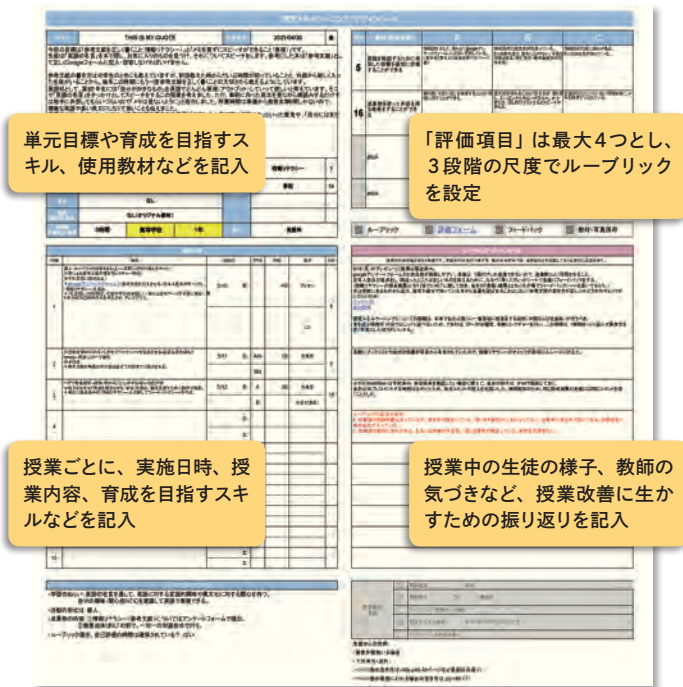
探究学習に必要なスキルを 教科学習での探究的な活動で育む

そのようにして策定した「育てたい資質」と「評価項目」を活用し、全教科・科目で探究的な活動を充実させている。「育てたい資質」の中から「探究基礎」に必要と考える6つ(*2)を「探究スキル」に位置づけ、それらを育成する探究的な活動を「探究スキルラーニング」(*3)として、各教科・科目で行うことにした。

「各教師は、担当教科・科目でどのスキルを育成し、そのために必要な活動は何かを考えて、探究科の学校司書、司書教諭と協働し

* 1 物や情報を分類・整理するためのラベル。 * 2 「課題設定」「情報リテラシー」「クリティカルシンキング」「ロジカルシンキング」「データサイエンス」の6つ。 * 3 「探究スキルラーニング」の授業内容は、同校のウェブサイトで開催されている。https://seishokaichi.jp/curriculum/ssh/class/

図2 「探究スキルラーニング デザインシート」(単元計画と改善のツール)



「デザインシート」は、「Google スプレッドシート」(*5) で運用し、全教師が見られるようにした。使用した教材や書籍のリンクを設定するなど、情報を電子化して共有することで他教科・科目の取り組みを参考にする仕組みを、同校では探究科の学校図書館担当者が作成している。※学校資料をそのまま掲載。拡大した図は、同校のウェブサイトからダウンロードいただけます。「HOME > 教育計画 > 探究スキルラーニング授業紹介」をご覧ください。 <https://seishokaichi.jp/wp-content/uploads/2021/05/d171a1c62d2101812fbfe22691bfcd6a.pdf>

て、単元計画(図2)を繰り返します。

加えて、育成したいスキルの到達度を測る『評価項目』を決め、評価規準とするルーブリックも作成し、生徒に示します。各教科・科目の授業で何を学び、それが『探究基礎』にどう生きるのか、生徒も教師も明確に意識できるようにしました(田村先生)

「評価項目」は、1単元最大で4つとし、ルーブリックは3段階の尺度とした。授業後、ルーブリック

クに基づいて、生徒は自己評価と相互評価、教師は生徒評価を行う。

「評価は『Google フォーム』(*4)を活用し、単元ごとに評価結果を集計したり、各単元のタグを収集して『評価項目』ごとに評価された回数を出したりします。評価結果の可視化によって、成果や課題を把握しやすくなったことで、授業改善が進みました(田村先生)

ブレイクスルー

探究学習が生徒のキャリアにつながる

生徒個別につく論文指導の担当教師が、進路選択も支援

そのように、全教師で策定した「育てたい資質」と「評価項目」を軸に「探究基礎」と「探究スキルラーニング」をつなげ、中学1年次から探究的な学びや探究学習を計画的に進めていくと、生徒は「育てたい資質」を着実に身につけ、学問的な関心や社会問題に対する課題意識を持つようになっていった。

課題は、それが生徒のキャリア形成になかなか結びついていないことだった。進路支援主任の森川真吾先生は、次のように語る。

「18年度頃まで、本校では大学入試は一般選抜の受験者が大半で、『探究基礎』で取り組んだ内容と関連のない学部・学科に進学する生徒もいました。生徒全員が、目的

意識を持って進路を選べるようにしたいと考えました」

そこで見直したのが、進路指導の体制だ。高校2年次の「探究基礎」では、生徒が自分で課題を設定し、論文を執筆する。その際、教師は分担して、それぞれ約2人の生徒の論文指導を1年間担当するため、担当した生徒の社会や学問に対する関心を十分に把握できる。それを生かすべく、19年度からは、論文指導の担当教師が、生徒の進路指導も担当する体制とした。

「論文のテーマ別に卒業生の進路先を示し、探究が進路につながることを生徒に実感させるなど、『探究基礎』での学びを生かした進路支援をするようになってから、生徒の進路観が変わりました。『中学・高校で取り組んだ探究を大学でさらに深めたい』『探究した内容に関

*4 アンケートの作成や、その結果の集計・分析を行えるオンラインツール。 *5 オンライン上で使える表計算ソフト。



アップグレード

目指すは、挑戦し続ける学校集団

教科学習で日常的に

探究的な活動を行えるように

係する学問を学びたい」といった声がよく聞かれるようになったのです。総合型選抜・学校推薦型選抜に挑戦し、『探究基礎』の成果を生かして志望校合格を果たす生徒も増えていきました」（森川先生）

1人の生徒の論文と進路の指導を担当することは、教師にも大きな学びがあると、織田澤校長は語る。

「教師は、『探究基礎』の指導を通じて社会問題を把握し、その解決のためにはどのような資質・能力を持つ人材が必要とされるのかについて敏感になり、進路指導では、大学が求める人材の把握に努めるようになります。社会や大学から求められる人材像が分かれば、そこから逆算して、自校ではどのような生徒を育み、そのためにどのような教育活動をすればよいのかを具体的に考えられるでしょう」

そのようにして、個々の教師の意識が高まることで、「育てたい資質」と「評価項目」を見直す議論が活性化し、教育活動の質の改善につながるPDCAサイクルが回ると、織田澤校長は考えている。

「育てたい資質」と「評価項目」は、建学の精神を全校で共通理解するための材料であり、完成形はなく、常に議論しながら更新し続けていくものと位置づけている。同様に、探究学習や進路指導の体制も現状にとどまらず、見直していく考えだ。

「『探究基礎』の指導と進路の指導を同じ教師から受け続けると、生徒はその教師への依存度が高まり、主体的な進路選択ができなくなる恐れがあります。自分の進路について相談する人は自ら探し、最終的には自分の進路は自分で決める。そうした生徒の育成を目指していきます」（森川先生）

田村先生も、「探究スキルラーニング」を日常的なものにしたいと語る。

「『育てたい資質』を意識して授業改善に取り組むことを常態化し、『探究スキルラーニング』という枠組みを設けなくても、常に教科学習で探究的な活動が行われるようにしたいと考えています」

今後の課題は、ICTを効果的

に活用し、新たな挑戦に力を注げるように効率化を図ることだ。

「例えば、クラス全体の目標達成度を数値で把握すれば授業改善を図れますが、評価を多様に行うと、分析に時間がかかります。自動化できる部分を見極め、教師も生徒も評価疲れを起こさずに、より高みを目指すよう支援をしていきたいと考えています」（織田澤校長）



校長
織田澤博樹
おたざわ・ひろき

教職歴9年。同校に赴任して9年目。



主幹教諭、
探究部
田村幹樹
たむら・もとき

教職歴15年。同校に赴任して6年目。理科。



主幹教諭、
進路支援主任
森川真吾
もりかわ・しんじ

教職歴13年。同校に赴任して5年目。英語科。

お勤めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

学年団

担任